

サトウキビ Ni17の株出萌芽性の解明

緒方寿明・神門達也・竹牟禮穰・勝田明敏¹⁾・末川 修¹⁾
 (鹿児島県農業試験場徳之島支場・¹⁾鹿児島県農政部)

Toshiaki Ogata, Tatuya Kamikado, Minoru Takemure, Akitoshi Katuta and Osamu Suekawa :
 Elucidation of Ratooned Sprouting Characters of Sugarcane Cultiver Ni17 (RK91-1004)

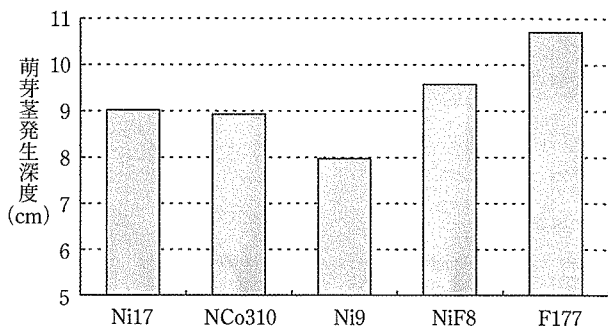
鹿児島県奄美地域のサトウキビ栽培は、地域経済を支える基幹作物として重要な地位を占めるが、近年特に株出栽培の面積と単収の減少が続いている。このため鹿児島県は株出萌芽性が優れ、株出栽培で多収となる Ni17 を2002年3月に新奨励品種に採用した。そこで株出栽培の安定生産技術を確認する一助とするため、新奨励品種 Ni17の株出萌芽性について検討した。

1. 材料および方法

供試品種は Ni17と、NCo310, Ni9, NiF8, F177を用いた。試料は1997年から2002年に、12月から2月頃に前作を手刈り収穫した跡の株を、5月から6月頃に掘り取り、地下部の土を洗い落としたものを用いた。調査項目は、前作収穫茎の地下節数および、萌芽茎の発生深度・茎数とした。萌芽茎の発生深度は、茎の地下部分の長さとした。また茎数の内、調査時点で地上に出ているものを萌芽茎数とし、伸び始めているがまだ地上に出ないものを土中萌芽茎数とした。

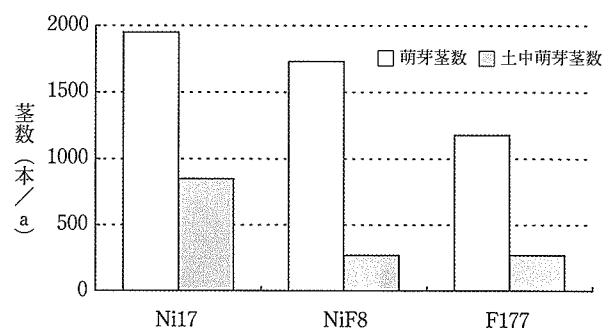
2. 結果および考察

Ni17の萌芽茎の発生深度は NCo310と同程度で、Ni9よりやや深く、NiF8と同程度かやや浅く、F177より浅かった (第1図)。



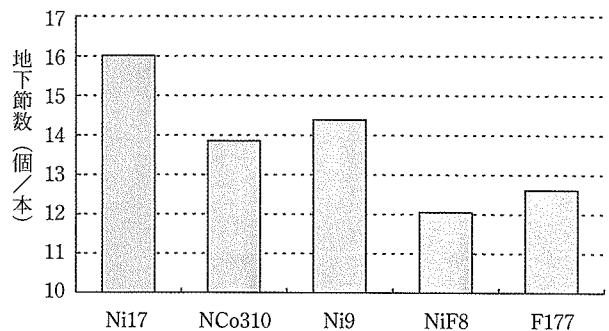
第1図 株出萌芽茎の平均発生深度 (1998年～2001年)

萌芽茎数および土中萌芽茎数は、Ni17が他の品種より多かった (第2図)。また Ni17の前作収穫茎の地下節数



第2図 萌芽茎数および土中萌芽茎数 (2001年～2002年)

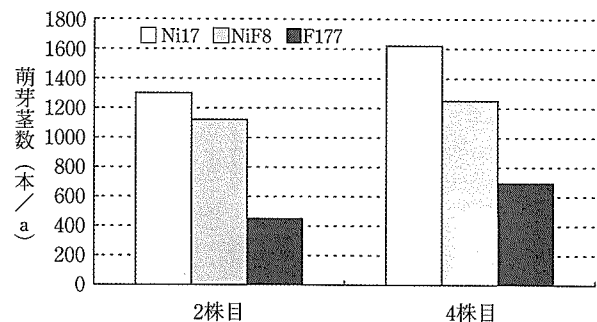
は供試品種の中で最も多く、NCo310と Ni9は Ni17よりやや少なく、NiF8と F177は少なかった (第3図)。Ni17



第3図 前作収穫茎の平均地下節数 (1998年～2001年)

の地下節数は、NCo310や Ni9などの株出萌芽性が優れるといわれる品種より多かった。このことから Ni17の高い株出萌芽性は、地下節数が多く、芽子数が多いことが関与していると考えられた。

第4図に株出し2年目と株出し4年目の萌芽茎数を示した。いずれの品種も2年目より4年目の萌芽茎数が多かった。特に Ni17は4年目の萌芽茎数が多く、多回株出栽培に適すると考えられた。



第4図 株出回数を重ねた時の萌芽茎数

以上の結果から、株出萌芽性に関する Ni17の特徴として、萌芽茎の発生深度は NCo310や Ni9と同程度であるが、前作収穫茎の地下節数が多く、芽子数が多いこと、株出回数を重ねても萌芽茎数が多いことなどがわかった。これらの特徴のため優れた株出萌芽性を示し、多回株出栽培に適すると考えられた。

Ni17の地下部を観察すると地下茎の発達が著しく、このため株の支持力が強く、さらに地下節数が多いために根系が発達し、株出しが優れているばかりでなく、Ni17の特性である高い耐倒伏性にもつながると考えられた。